茨城大学教育学部紀要（教育科学）61 号（2012）43 － 58

大正・昭和戦前期全国中等学校図画教員の総覧的研究（１）
―直轄諸学校―

金子　一夫 *

（2011 年 11 月 25 日受理）

A Research on Drawing Teachers at Secondary Schools in Taisho and Showa Era Pre-World War Ⅱ
Part 1：National Schools

Kazuo KANEKO*

（Received November 25, 2011）

１．緒言

中等学校における図画教育の実践史的研究は初等学校のそれに比べて未開拓である。初等学校では図画専科教員が少数いたものの基本的には全科担当教員である。それに対して中等学校は基本的には図画専門教員であったのに，中等図画教育実践史的研究は，いわば空白地帯であった。

中等教育図画教育の実践史的研究の基礎として，まず，学校毎に教員と勤務時期の確定が必要である。筆者は既に明治期の中等学校図画教員の全国的な勤務を明らかにし「明治期図画教員総覧」として発表した[1)]。筆者はその継続として，大正・昭和戦前期の全国中等学校図画教員勤務表作成を試みる。本稿はその第一稿で，教育政策上重要という理由で直轄学校を取り上げる。時期的範囲は大正元年から終戦の昭和 20 年までとする。昭和 23, 24 年に中等学校は制度的大変化をする。それは別に取り上げるべきであると考える。この戦後の変化は必要に応じて適宜触れる。

基本的な研究方法論を確認しておく。中等学校教員の異動は全国にまたがる。府県立学校教員でも全国を異動した。それゆえ，中等学校教員の勤務は，全国を対象に調査しないと，十分に把握しがたい。しかも，三月や四月といった年度の区切りだけではなく，一年中突然に離任・赴任がある。それゆえ「明治期図画教員総覧」でしたような，学校毎に各図画教員の勤務期間を棒グラフ状に表示するのが最も把握しやすい。それを全国府県順に敷き詰めると大正・昭和戦前期における図画教員勤務の地図的全体像ができる。

単に図画教員の氏名を勤務期間の線分とともに並べただけでは，地域や時期の特徴は把握しようがない。各教員の属性なり類型が必要である。そこで師匠や出身学校＋卒業年月という出自を図画教員の基本的属性とした。そうすると時期や地域による図画教員勤務の特徴が色彩をもった視覚的

*茨城大学教育学部美術科教育研究室（〒 310-8512　水戸市文京 2-1-1； Laboratory of Art Education, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）.

像として看取できる。日本画や西洋画といった専門や出身学校の割合の変化も見えてくる。

2．基本的な調査方法と参照資料

次に図画教員の氏名と勤務期間の特定方法を述べる。基本的な資料として以下のような資料を調査・参照した。

1. 中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』（明治 37 年～昭和 18 年 ?）

これは教科書会社が組織する中等教科書協会が，全国の中等学校毎に教員と担当教科を一覧にして毎年発行した名簿である。これだけで概要は把握できるはずである。しかし，誤植が多いこと，営業社員用に作成したためか発行部数が極端に少なく，全冊を参照できないという難点がある。国立国会図書館には明治期刊行の三冊，昭和期刊行の十七冊し所蔵されていない。大正期発行の所蔵はない。古書としてもほとんど市場に出て来ない。とはいえ，これによって全国庁府県及び旧植民地の学校の図画教員と勤務時期の基本的情報が作成できる。しかも，国会図書館所蔵本は平成 23 年半ばから Web 公開されるようになり，それ以前に比べれば参照は格段に容易になった。

2. 庁府県の『学事関係職員録』あるいは『教育関係職員録』

各府県あるいは各府県教育会編纂で各年度発行されていた。第二次大戦後は各府県教職員組合も『教育関係職員録』を発行することが多い。これも図画教員調査の基本的資料である。しかし，当該の府県立図書館に当該府県の『学事関係職員録』が全冊完備されているわけではないことと，教員名だけで担当教科が記載されていない場合が多いという難点がある。そのため，図画担当教員が特定できないことがしばしばある。担当教科が記載されていない職員録は，後述の図画教員データベースから図画教員を特定する。

3. 学校一覧，学校史，同窓会名簿といった学校毎の出版物

これらに「旧職員一覧」といった項目の下, 教員名と勤務期間が記されていることがある。ただ，出版物によって情報にかなりの差がある。氏名・担当教科・勤務期間が正確に記されている場合，担当教科が記載されていない場合, 旧教員の氏名だけをアイウエオ順に記したものまで様々である。教員名だけの記載の場合は，ほとんど役に立たないい。また，同窓会名簿は閲覧を規制している図書館があり，調査を困難にしている。図書館によって対応は様々である。担当教科が記載されていない場合は，前項と同じように図画教員データベースから図画教員を特定する。

4. 図画教育関係雑誌

戦前の図画教育関係雑誌には個人の消息欄があり, 異動が近況報告として寄せられることがある。これも貴重な情報であるが，異動時期が編集者に「最近」といった言葉で簡略化されてしまうことが多く，時期が漠然としか特定できないこともある。また，図画科と関係が深い手工科の教員の情報であることも多く，図画科担当教員かどうかを注意する必要がある。

5. 図画教員であった個人の出版物，履歴，資料等

図画教員が自伝や画集を出版することがある。それらに経歴が掲載されることがある。また，旧勤務校によっては履歴の閲覧が許されることがあり，最も確実な勤務期間の特定ができる。ただ，履歴は間違や兼務事項等の省略があることもあり，鵜呑みにすると間違うことがある。図書館所蔵の学校文書もかつては公開されていたが, 最近は個人情報保護ということで制限する図書館があり，図書館機能の自己否定のような状況がないわけでもない。

3．図画教員データベース

戦前の美術専門学校は中等学校図画教員の養成機能も果たした。中でも師範科卒業生はほとんど図画教員になる。絵画科や図案科卒業生も図画教員になる可能性が大きい。それ故，昭和 20 年までのこれら卒業生をデータベースの基本とした。（）内は後掲の勤務表中での略記である。

東京美術学校図画師範科：　約 750 名（東美図師）
同絵画科・日本画科，西洋画科・油画科，図案科：　約 3,250 名（東美絵・日，西・油，図案）
東京高等師範学校図画手工専修科：　約 300 名 （東高師図手）
東京女子高等師範学校図画専修科：　約 400 名 （東女高師図）
京都市立絵画専門学校絵画科：　約 1,500 名 （京市絵専）
女子美術学校日本画科，西洋画科：　約 1,700 名 （女美日，西）
東京高等工業学校図案科：　約 250 名　（東高工図案）
東京高等工芸学校図案科：　約 500 名　（東工芸図案）
京都高等工芸学校図案科：　約 1,000 名 （京高工図案）
広島高等師範学校附設第二臨時教員養成所図画手工科：23 名　（広高師図）
帝国美術学校師範科：　本稿執筆時での判明分　約 50 名　（帝美師）
不同舎：　約 300 名　（不同舎）
文部省検定試験図画科合格者　約 1,500 名 （文検）

その他画塾・画家名簿等から約 1,000 名を加えて，合計約 12,000 名のデータベースを作成した。

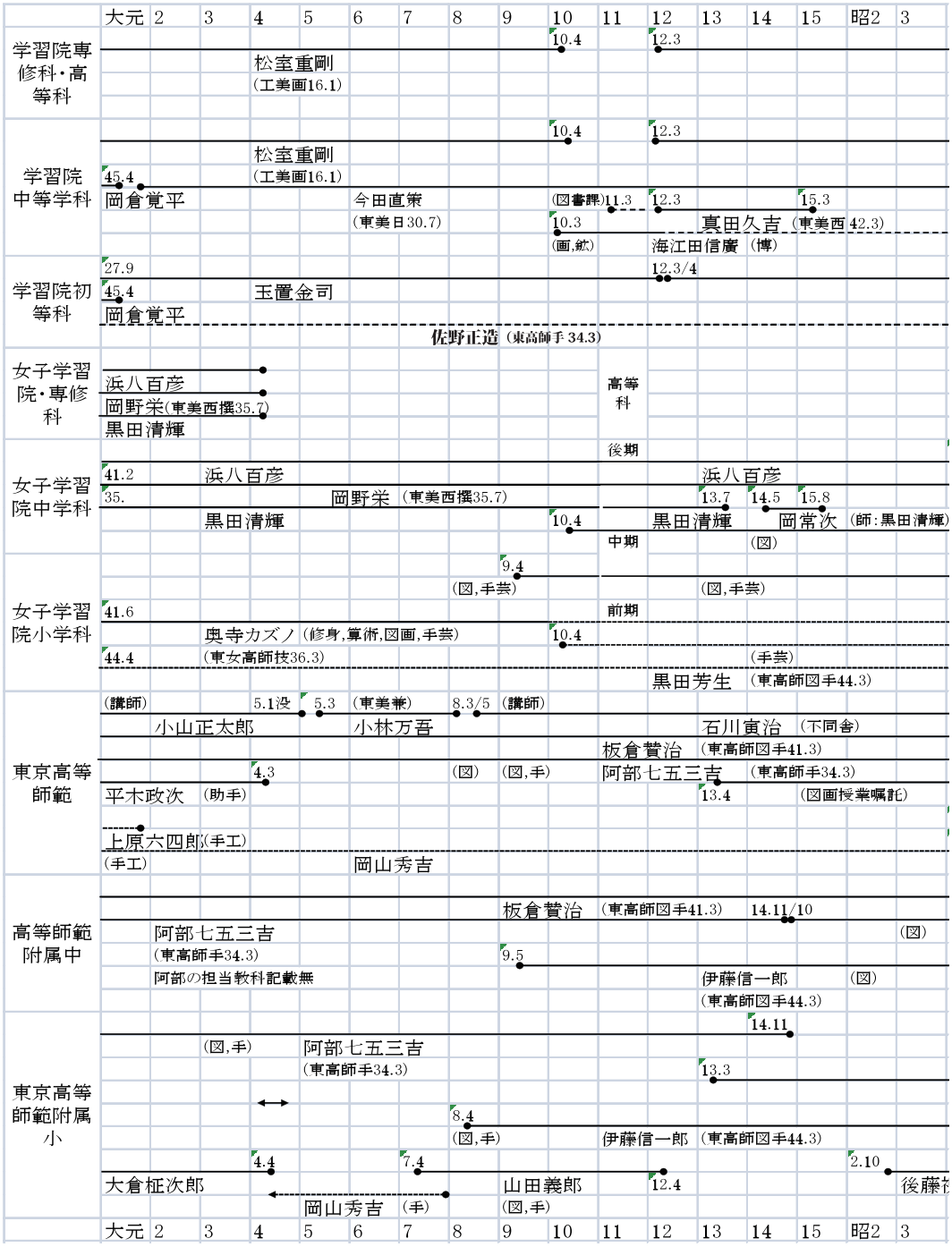
今後，その他の図画教員経験実績者を追加していくと，最終的には 15,000 名くらいのデータベースとなると想定している。そうすれば，戦前期の全図画教員をほぼカバーできるのではないかと考えている。ただ，図画授業担当者は学校の事情による単なる短期間の兼担者である場合がかなりある。それらは勤務表には記入されるが，データベースに入れるには兼担教員のファイルを作らなければならないほど人数が多い。どう処理するか今後の課題である。

また，当然ながら世の中には同名異人がたくさんいる。学校史等の旧職員一覧に図画教員データベースにある人名であるからといって，図画教員であると速断するのは危険である。

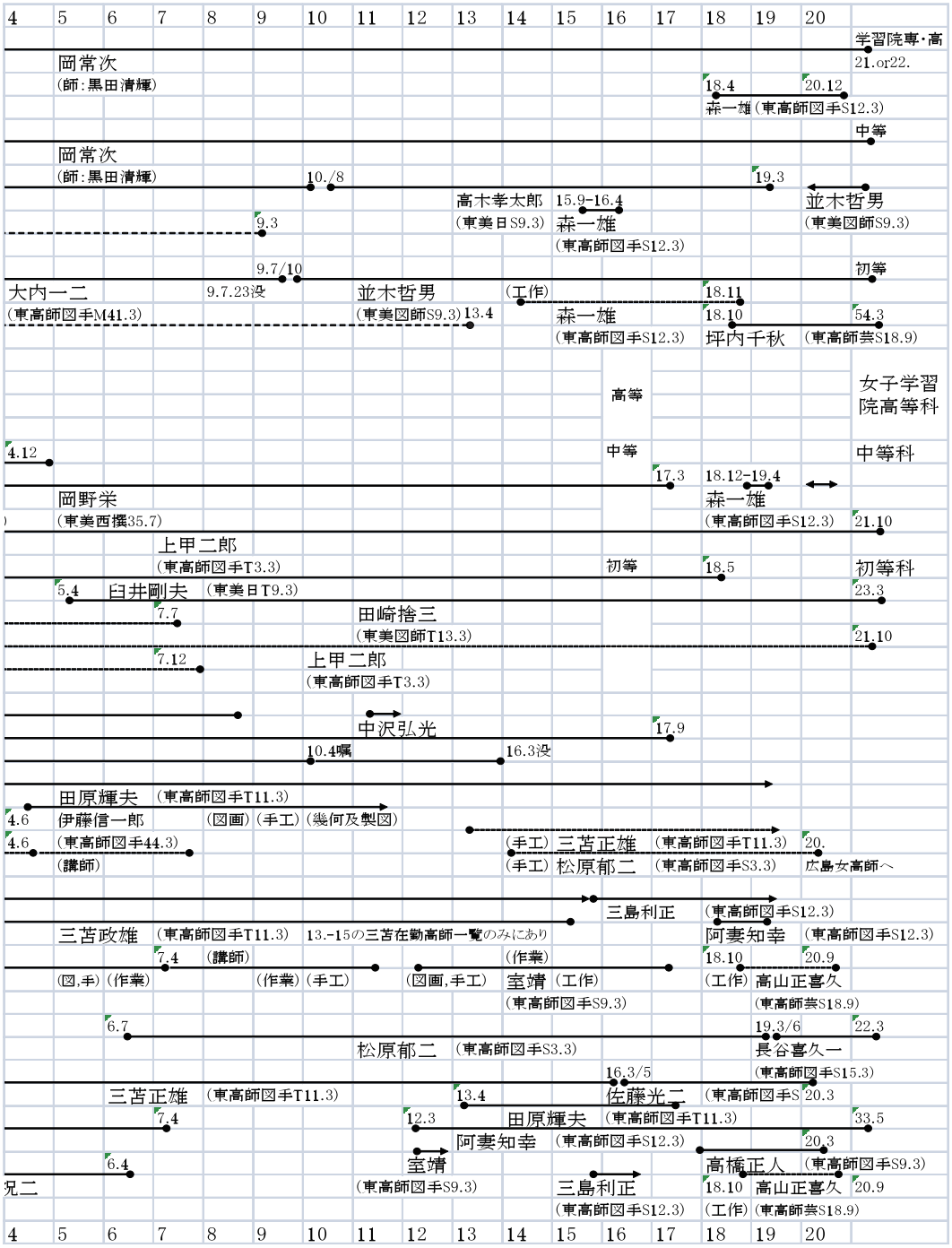
それから，氏名表記が現在に比べると融通無碍で，データベース化や特定作業での困難さの原因になっている。特に女性教員の表記は多様である。たとえば, 名が「鈴」の場合「鈴子」「すず」「すずこ」「スズ」「スズコ」「すゞ子」「スゞ子」といった多様な表記になる。データベースにはそれらの可能性をデータ化しておかないと，データベース検索では辿りつけない。人それぞれに正式な使用漢字や読み方があるはずであるが，戦前はあまり気にしなかったらしく，名簿の版毎に違っていることもある。一般的な読み方も登録してあるが, これも単純ではない。先ほどの「鈴」は「りん」と読ませる可能性もあるからである。また実際の図画教員で「福政介介」「手塚宇宙児」「平兮珊司」といった難読氏名の例がある。

原則として旧字は新字に直して登録してある。しかし，例えば龍を竜，瀧を滝に直してよいかは迷うところである。また，隆は隆の異体字で見分けがつきにくい。異体字の隆とは気がつかないで図画教員データベースに登録してしまうと，後に隆で検索しても永遠に当たることはない。

表１　学習院・東京高等師範図画教員表

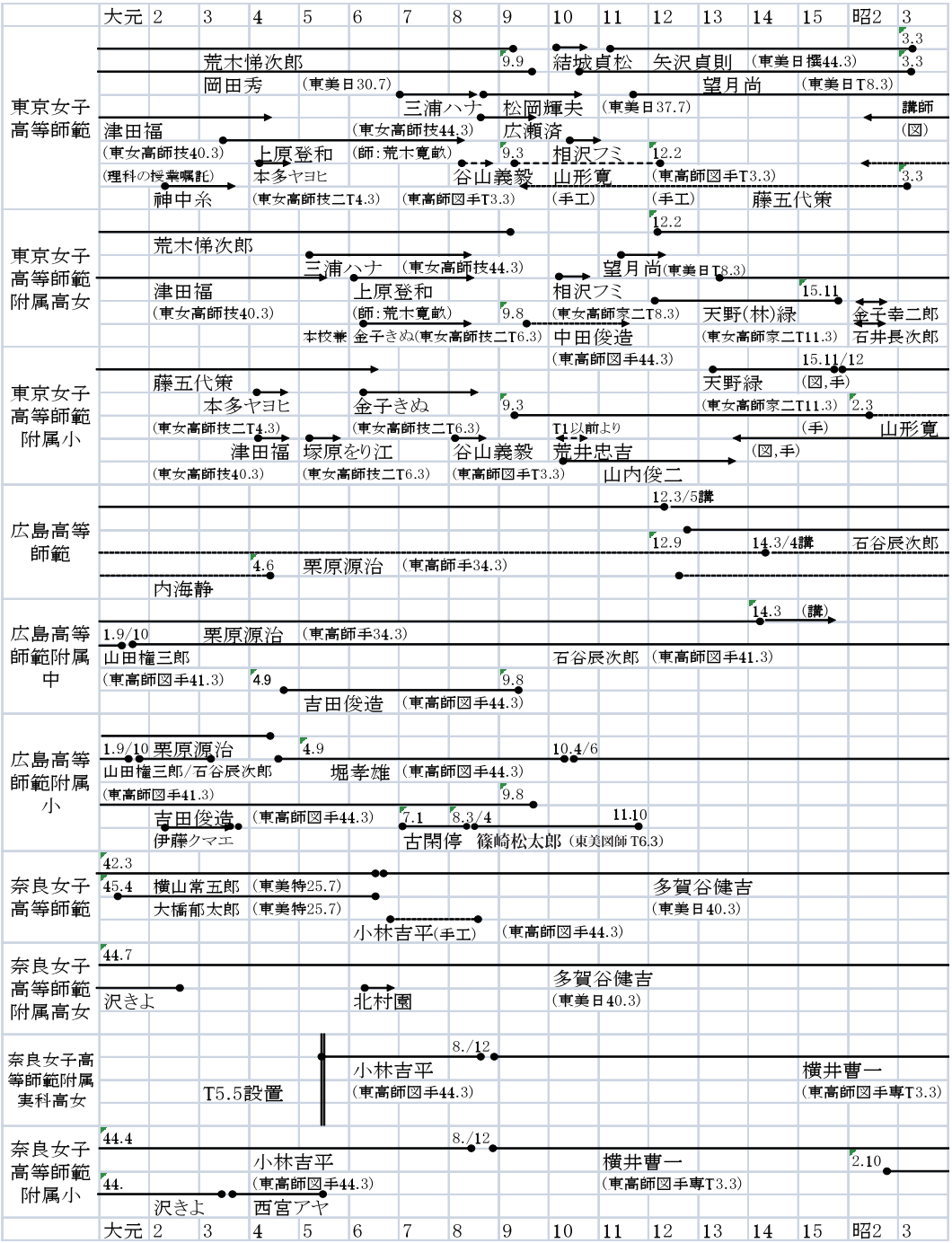


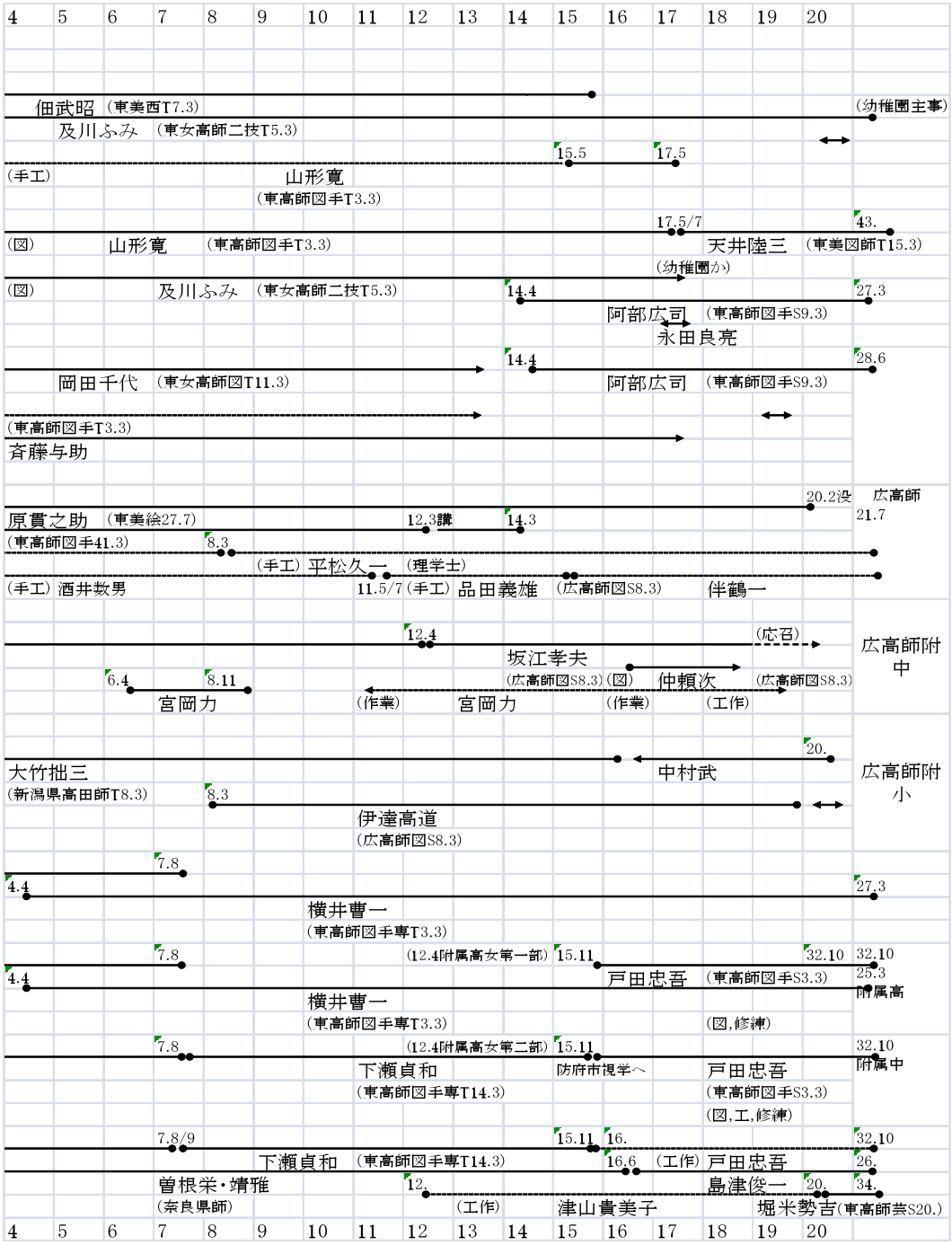
表の凡例：校名は昭和 18 年４月１日現在で統一した。図画教員としての勤務期間を実線で示し，両端の数字で就退任の年月を示した。線分の端が矢印はその時点まで勤務が確実であることを示す。手工科や休職は破線で示す。



人名下部の（　）内は卒業学校と卒業年月，あるいは担当科目。卒業学校名は「3. 図画教員データベース」で示したように略記した。

表２　東京女子高等師範学校・広島高等師範学校・奈良女子高等師範学校図画教員表




4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
佃武昭 (東美西T7.3) (幼稚園主事)
及川ふみ (東女高師二技T5.3)
15.5 17.5
(手工) 山形寛
(東高師図手T3.3)
17.5/7 43.
(図) 山形寛 (東高師図手T3.3) 天井陸三 (東美図師T15.3)
(幼稚園か)
(図) 及川ふみ (東女高師二技T5.3) 14.4 27.3
阿部広司 (東高師図手S9.3)
永田良亮
14.4 28.6
岡田千代 (東女高師図T11.3) 阿部広司 (東高師図手S9.3)
(東高師図手T3.3)
斉藤与助
20.2没 広高師 21.7
原貫之助 (東美絵27.7) 12.3講 14.3
(東高師図手41.3) 8.3
(手工) 平松久一 (理学士)
(手工) 酒井数男 11.5/7 (手工) 品田義雄 (広高師図S8.3) 伴鶴一
12.4 (応召) 広高師附中
坂江孝夫
6.4 8.11 (広高師図S8.3) (図) 仲頼次 (広高師図S8.3)
宮岡力 (作業) 宮岡力 (作業) (工作)
20.
大竹拙三 中村武 広高師附小
(新潟県高田師T8.3) 8.3
伊達高道
(広高師図S8.3)
7.8
4.4 27.3
横井曹一
(東高師図手専T3.3)
7.8 (12.4附属高女第一部) 15.11 32.10 32.10
4.4 戸田忠吾 (東高師図手S3.3) 25.3 附属高
横井曹一
(東高師図手専T3.3) (図,修練)
7.8 (12.4附属高女第二部) 15.11 32.10 附属中
下瀬貞和 防府市視学へ 戸田忠吾
(東高師図手専T14.3) (東高師図手S3.3)
(図,工,修練)
7.8/9 15.11 16. 32.10
下瀬貞和 (東高師図手専T14.3) 16.6 (工作) 戸田忠吾 26.
曽根栄・靖雅 12. 島津俊一 20. 34.
(奈良県師) (工作) 津山貴美子 堀米勢吉 (東高師芸S20.)
4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

4．直轄学校 1

最初に直轄学校を取り上げる。直轄学校には，学習院，高等師範，陸軍幼年学校等がある。学習院と高等師範には高等・専門教育の本校と附属初等・中等学校がある。そして，図画担当教員はそれらの初・中・高等学校間で兼務や異動をしていて複雑な勤務の様相を呈している。そのため，学習院と高等師範に関しては，それぞれ初・中・高の図画教員勤務を並べていくことにする。

1. 学習院

勤務期間の特定のために『学習院一覧』等を参照した[2)]。学習院は明治期から西洋画と日本画の両方を教えてきた。西洋画教員として明治 22 年から大正 10 年まで工部美術学校出身の松室重剛が教える[3)]。その後，大正 12 年から黒田清輝門下の岡常次が昭和 21 年頃まで勤務し，日本画教員としては岡倉覚平（秋水）が明治 29 年 12 月から明治 45 年 4 月まで勤務した[4)]。岡倉と交代するかのように東京美術学校日本画科出身の今田直策が中等学科に大正元年から昭和 10 年まで勤める。その後は東京美術学校日本画科卒業の高木直太郎が昭和 19 年３月まで勤務する。初等科は玉置金司が大正 12 年まで，その後は東京高等師範学校図画手工専修科卒の大内一二，東京美術学校図画師範科卒の並木哲男と続く。東京高等師範学校図画手工専修科卒の森一雄が工作担当とした赴任したが，明治 18 年に専修科に転じ，さらに昭和 19 年に陸軍士官予科学校に異動し，その後は嘱託として勤務した。初等科は東京高等師範芸能科を昭和 18 年９月に卒業直後の坪内千秋が赴任し，昭和 54 年３月までの 35 年間勤務した[5)]。学習院には長年勤務する教員が多いと言える。

2. 女子学習院

勤務期間の特定に『女子学習院一覧』等を参照した[6)]。学習院大学アーカイブズのカードでも確認。浜八百彦と岡野栄，そして嘱託として黒田清輝という三人体制が続く。浜八百彦は鹿児島県出身，岡野栄は東京美術学校西洋画撰科卒で黒田清輝の教え子である。岡野は昭和 17 年３月までの 35 年間務める。初等科には最初，東京女子高等師範学校技芸科卒の奥寺カズノが図画も教えている。東京美術学校卒の白井剛夫，田崎捨三が赴任したためであろうが，図画科担当ではなくなる。また，手芸・手工担当に黒田芳生，上甲二郎という高等師範学校図画手工専修卒業の二人が勤務する。ただ，黒田も大正初期は手芸・手工の専門というより全科担当であった。

3. 東京高等師範・同附属中・附属小

『東京高等師範学校一覧』，東京高等師範学校『創立六十年』，『東京教育大学附属小学校百年史』等を参照した[7)]。東京高等師範学校では，同一人が本校，同附属中，附属小のいずれかが本務で，他を勤務することが通常であり，そして本務と兼務が複雑に入れ替わるのが特徴である。それが錯綜していて正確に把握しきれない。旧職員一覧や履歴書等が学校一覧と違う場合は，学校一覧の記載事項を優先した。書類上の籍と，実際の担当がちがう場合もあると思われる。

東京高等師範学校本校は小山正太郎，小林万吾，石川寅治という大物西洋画家が講師を務め，常勤としては小山正太郎に高等師範で教えを受けた板倉賛治がずっと図画を担当する。手工は上原六四郎，岡山秀吉という大家が担当する。二人の退職後は二人に指導された阿部七五三吉がずっと勤務する。板倉は附属中，阿部は附属中，附属小でも手工だけではなく図画も教える。大正半ばから，明治・大正期に東京高等師範図画手工科の卒業生である伊藤信一郎，田原輝夫，三苫正雄が赴任する。昭和６年あたりから，昭和期の図画手工専修科卒業生である松原郁二，室靖，阿妻知幸，三島

利正等が赴任する。彼らは戦後の美術教育界の指導的教員になっていく。

4. 東京女子高等師範・同附属高女・同附属小

『東京女子高等師範学校一覧』等を参照した[8)]。東京女子高等師範には技芸科，さらにそれをより専門化した図画専修科が昭和3年3月まであった。荒木悌次郎（十畝），岡田秀（秋嶺），松岡輝夫（映丘），矢沢貞則（弦月），望月尚（春江）と錚々たる日本画家が教員として勤務した。しかし，昭３年３月に廃止され，４月からは東京美術学校西洋画科出身の講師佃武昭と，幼児教育専門になっていく専任の及川ふみが図画を担当する。大正9年から東京高等師範図画手工専修科の山形寛が本校に赴任するが，手工担当である。図画専修科があった時代は附属高女も既述の日本画家やその弟子が教えていて華やかであった。廃止後は，附属高女も山形寛と及川ふみが図画を担当した。附属小学校も大正半ばから山形寛が担当し，大正末に岡田千代が赴任してからの山形は主に手工を担当する。山形寛は昭和17年5月に文部省図書監修官になり，本校での山形の後任は無かった。ただ，附属高女には天井陸三が山形の後任として赴任する。これより前，昭和14年4月から東京高等師範学校図画手工専修科卒の阿部広司が附属高女と附属小に赴任する。天井は昭和45年まで，阿部広司は昭和27年頃まで勤務する。本校に明確な専任の図画・手工教員が勤務していなかったことから，お茶の水女子大学に転換するときに美術関係専攻が残らなかった遠因になっていると思われる。

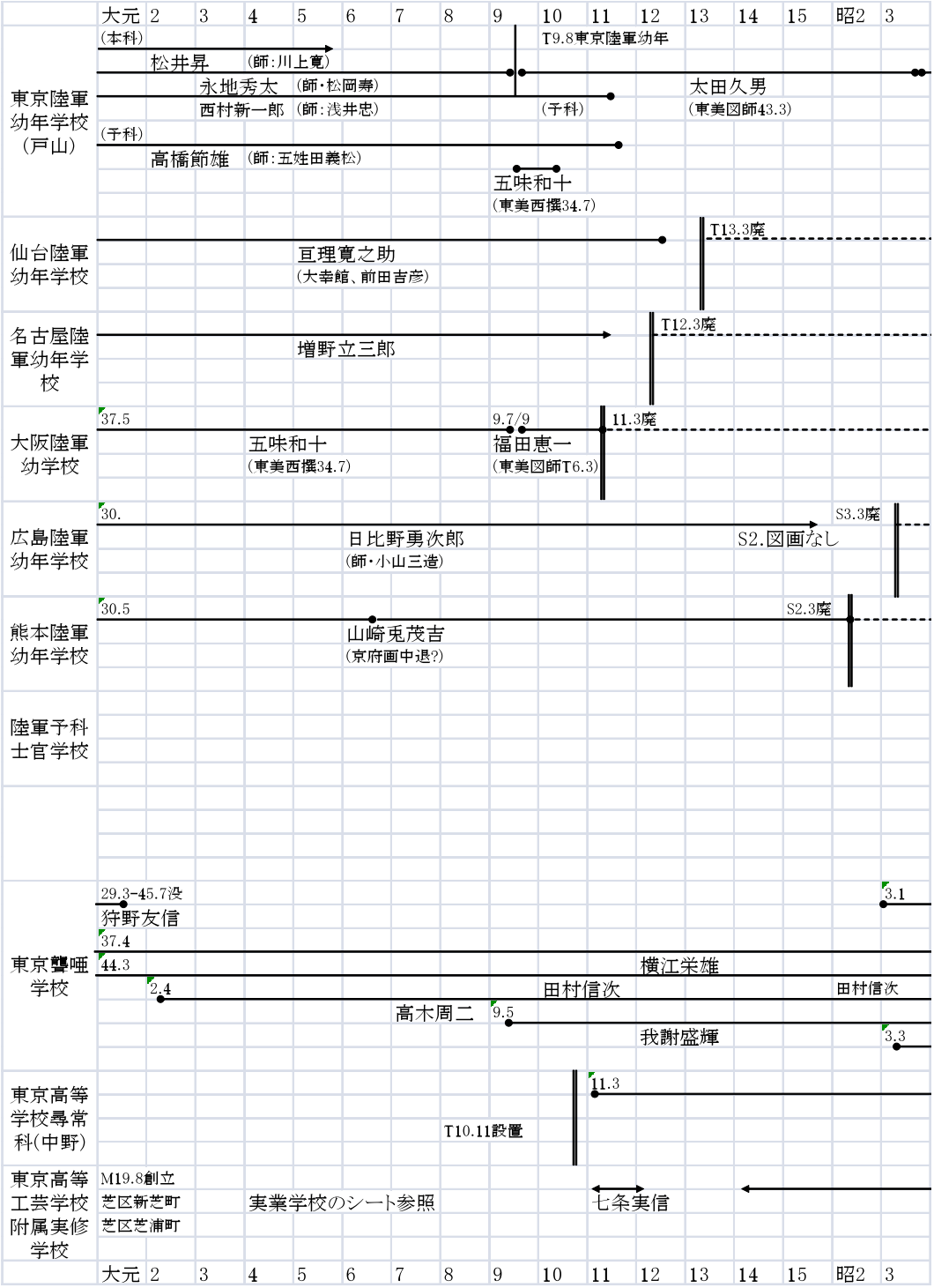
5. 広島高等師範・同附属中・同附属小

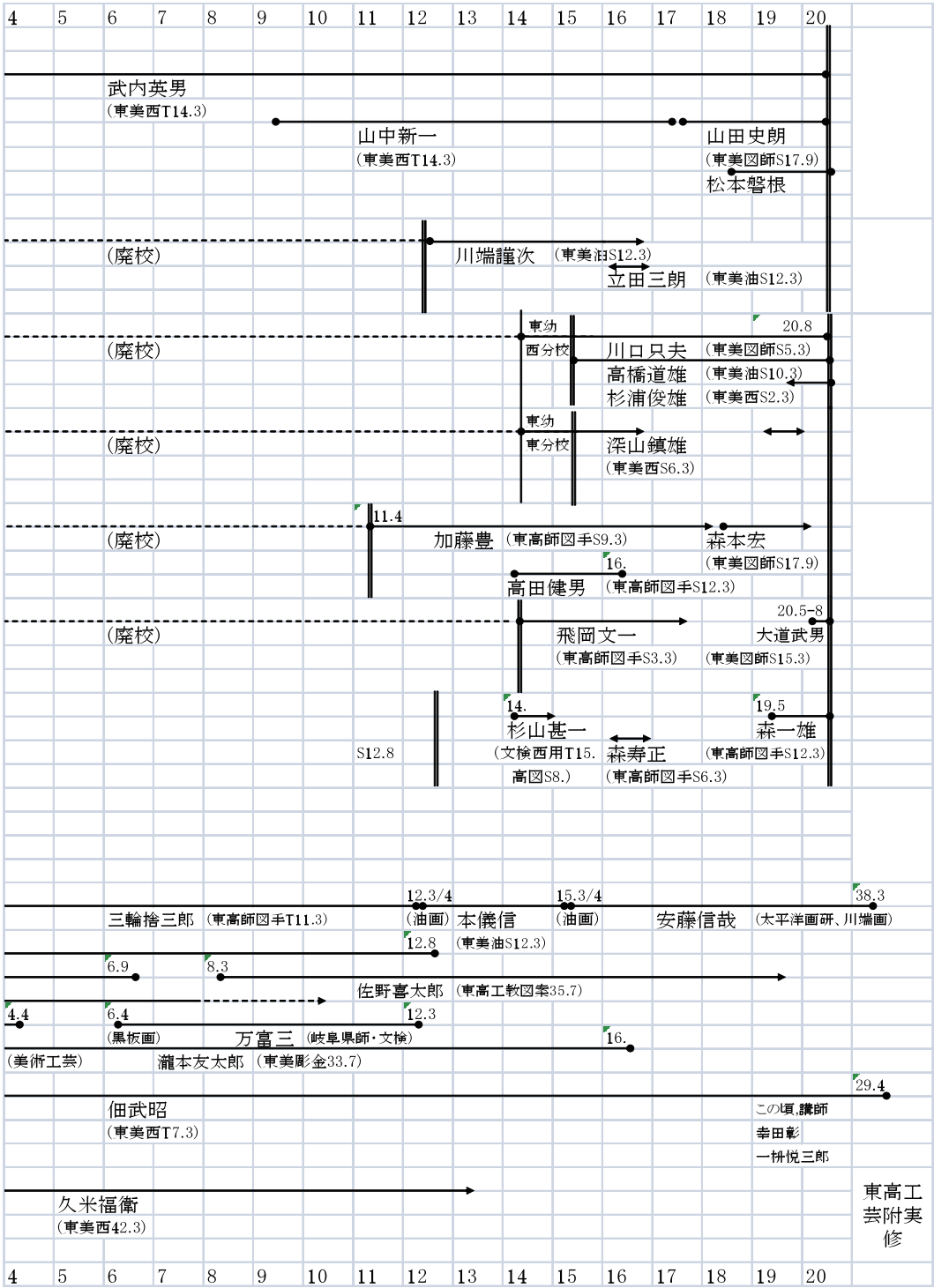
『広島高等師範学校一覧』等を参照した[9)]。広島高等師範は東京美術学校絵画科出身の原貫之助が図画，東京高等師範学校手工専修科卒の栗原源治が手工を担当し，同校の図画手工教育を確固たるものにした。原貫之助は大正12年に専任を退職するが，その後は講師として昭和20年2月に没するまで約20年在職した。栗原退職後の手工は東京高等師範図画手工専修科出身の石谷辰次郎に引き継がれていく。同校附属小は大正半ばに東京高等師範図画手工専修科卒の堀孝雄，大正10年から昭和16年まで新潟県高田師範学校卒の大竹拙三という才人が勤務して活躍する。広島高等師範学校には第二臨時教員養成所が附設され，その中で図画専修科が一回だけ設置され昭和８年に23名の卒業生を出した。その卒業生が何人か教員として本校及び附属に赴任する。

6. 奈良女子高等師範・同附属高女・同附属実科高女・同附属小

『奈良女子高等師範学校一覧』等を参照した[10)]。奈良女子高等師範学校には大正６年まで横山常五郎，大橋郁太郎，その後は大正7年まで多賀谷健吉といった東京美術学校卒業の日本画家が勤務する。横山は生徒であった溝上遊亀（国語漢文科大正6年卒）を指導した。横山は大正8年に神奈川県女子師範学校教員になる。溝上も大正9年から横浜の捜真女学校教員になる。附属高女は多賀谷健吉が兼務する。附属小学校そして大正５年に新設された附属実科高女には東京高等師範図画手工専修科卒の小林吉平が勤務する。小林の後任として大正８年12月から横井曹一が赴任する。横井は多数の図画手工関係の著書を書いて新しい教材や題材を提案した。大正から昭和初期の関西図画教育界は横井方式一色になったとも言われる。附属小にはその後曽根栄（靖雅）が赴任して主事の木下竹次の主張に沿った実践を展開した。横井は昭和７年に本校と附属高女へ移り，附属実科高女と附属小は下瀬貞和が後任となる。下瀬も昭和15年に山口県へ転任し，その後に戸田忠吾が赴任する。戦後の奈良女子大学は教員養成を主目的としない文学部，家政学部等を設置した。横井曹一は家政学部でデザイン関係科目の教官になったが，昭和27年に辞職している。

表３　陸軍幼年学校・東京聾唖学校・東京高等学校等図画教員表




4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
武内英男
(東美西T14.3)
山中新一
(東美西T14.3)
山田史朗
(東美図師S17.9)
松本磐根
(廃校)
川端謹次 (東美油S12.3)
立田三朗 (東美油S12.3)
東幼
西分校
20.8
(廃校)
川口只夫 (東美図師S5.3)
高橋道雄 (東美油S10.3)
杉浦俊雄 (東美西S2.3)
東幼
東分校
(廃校)
深山鎮雄
(東美西S6.3)
11.4
(廃校)
加藤豊 (東高師図手S9.3)
森本宏
(東美図師S17.9)
16.
高田健男 (東高師図手S12.3)
20.5-8
(廃校)
飛岡文一
(東高師図手S3.3)
大道武男
(東美図師S15.3)
14.
杉山甚一
(文検西用T15.
高図S8.)
19.5
森一雄
(東高師図手S12.3)
S12.8
森寿正
(東高師図手S6.3)
12.3/4
15.3/4
38.3
三輪捨三郎 (東高師図手T11.3)
(油画)
本儀信
(油画)
安藤信哉 (太平洋画研、川端画)
12.8
(東美油S12.3)
6.9
8.3
佐野喜太郎 (東高工教図案35.7)
4.4
6.4
12.3
(黒板画)
万富三 (岐阜県師・文検)
16.
(美術工芸)
瀧本友太郎 (東美彫金33.7)
29.4
佃武昭
(東美西T7.3)
この頃,講師
幸田彰
一枡悦三郎
久米福衛
(東美西42.3)
東高工芸附実修
4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

5．陸軍幼年学校

明治期から陸軍士官学校入学生を養成するために東京に陸軍中央幼年学校があり，そして仙台，名古屋，大阪，広島，熊本に陸軍地方幼年学校があった。陸軍地方幼年学校を卒業して中央幼年学校へ入学し，さらにそこを卒業して陸軍士官学校へ入る仕組みであった。しかし，大正９年８月に陸軍中央幼年学校が廃止され，その本科は陸軍士官学校予科に，予科は東京陸軍幼年学校として再出発した。地方幼年学校も陸軍幼年学校となった。しかし，東京を除いた地方幼年学校は大正 11 年から昭和３年の間に全て廃止された。その後，戦争拡大が予測されたため昭和 11 年から 15 年までに幼年学校は全て再設置された。昭和 12 年８月に陸軍士官学校予科が２ヶ年課程の陸軍予科士官学校として分離独立し，全国の陸軍幼年学校卒業生はまず陸軍予科士官学校に入学することになった。そこにも図学担当教員がいた。

陸軍幼年学校は全て昭和 20 年８月に終戦とともに廃止された。後身学校がないので図画教員調査は難しい。それでも昭和 40 年代，50 年代に卒業生たちがそれぞれの学校史を編纂していて，それらから図画教員がある程度判明する。また，大正末から昭和にかけての廃校時に紀念写真帖が編纂発行されていれば，それらに図画教員と勤務期間が記されている可能性がある。幼年学校の図画教員は勤務期間が長いのが特徴である。

陸軍諸学校の図画教育は，独立して検討すべき大きな問題である。ただここで概観的に言えば，陸軍諸学校の図画は用器画と自在画，あるいは図画と画学という区分がなされ，それぞれ芸術的表現を目指すものではなく，正確な記録と計算，そして伝達を目的とするものであった。作戦上，正確な地図や写景図作成，物体描写，様々な計画のため図上計算等は軍務上必要であった。それゆえ図画は陸軍諸学校において重要科目であり，巧拙はともかく技能習得は必須であった。それゆえ，幼年学校史には生徒の図画がけっこう挿図になっている。

1. 東京陸軍幼年学校

『陸軍中央幼年学校一覧』(大正３，５年)及び東幼会『東京陸軍幼年学校史　わが武寮』(昭和 57 年)等を参照した[11]。後者には「職員名簿」として勤務年月ではなく勤務期表示で教員が一覧になっている。『陸軍中央幼年学校一覧』（大正３，５年）によれば，本科に松井昇，永地秀太，予科に高橋節雄，本科兼任として西村新一郎という図画指導陣であった。いわば明治前期西洋画家たちが勤務していた。しかし，大正９年８月の組織改革後は，東京美術学校卒業生が図画教員として勤務する。本科は士官学校へ移り，予科だけが東京陸軍幼年学校となったためか，『東京陸軍幼年学校史　わが武寮』には，本科教員の松井昇，永地秀太，及び本科兼務の西村新一郎の名前は載っていない。また同書には「教授部の普通学科」として各教科の教科書と指導の実際等が考察されている。「図画」に関しても大正６年から『図画教程』三巻が使われたこと，そして自習用として『図画手簿』が使われたことが記されている。『図画手簿』とはスケッチブックのことであろう。

2. 仙台陸軍幼年学校

『仙台陸軍地方幼年学校一覧』（大正３年）を参照した[12]。亘理貫之助は，大幸館で西洋画を学び，明治 30 年から 36 年まで仙台陸軍地方幼年学校に勤務した後，明治 42 年から再赴任して大正 12 年の廃校直前まで勤務した。昭和 12 年に再設置後の仙台陸軍幼年学校の図画教員は，『山紫に水清き―仙台陸軍幼年学校史』等によって川端謹次が昭和 12 年から立田三朗が昭和 16 年頃勤務

したことだけ判明した。ともに東京美術学校西洋画科昭和 12 年３月の卒業生であった。

3. 名古屋陸軍幼年学校

『名古屋陸軍地方幼年学校一覧』（大正３年）及び名幼会『名幼校史』（名幼会，昭和 49 年）を参照した[13]。増野立三郎は明治 37 年以前から名古屋陸軍地方幼年学校に勤務していたことが確認される。そして廃校直前まで勤務した。昭和 14 年に東京陸軍幼年学校内に準備として西校が設置され，図画教員として東京美術学校図画師範科卒業の川口只夫が開校準備をした。川口は昭和 20 年８月に解散するまで勤務した。昭和 15 年に開校後，高橋道雄，杉浦俊雄というやはり美術学校油画科，西洋画科卒業者が赴任し，最後まで勤務した。

4. 大阪陸軍幼年学校

『大阪幼年学校一覧』（大正３年）及び『大阪陸軍幼年学校記念』（大正 11 年３月）の教員一覧を参照した[14]。『大阪陸軍幼年学校記念』は大正 11 年３月の廃校時に編纂発行された写真集である。その巻末に教員一覧があり，就任年月と勤務期間が示されている。それによって五味和十，福田恵一の勤務期間が判明した。五味和十は明治 37 年からの勤務である。再設置は名古屋陸軍幼年学校と同じように東京陸軍幼年学校東分校として準備が始まる。その時点から深山鎮男が勤務した。阪幼会『大阪陸軍幼年学校史』（阪幼会，昭和 50 年）には教員の勤務期間は記載なし。図画教員の人物記がある。

5. 広島陸軍幼年学校

広幼会『鯉城の稚桜―広島陸軍幼年学校史』（広幼会，昭和 51 年）の「主要学校職員表」を参照した[15]。日比野勇次郎は明治 30 年の開校時からずっと勤務し，廃校となる大正２年度は図画科が無かったので大正 15 年度で退職したと思われる。日比野は小山三造らに学んだ，明治期西洋画家である。高田健男以外は図画教員に退職年の記入がないので，退職年月は不確定である。『鯉城の稚桜―広島陸軍幼年学校史』の本文中に図画教員についての記述はないが，授業で作られたと思われる図画が幾つか挿入されている。

6. 熊本陸軍幼年学校

『熊本陸軍地方幼年学校一覧』（大正５年）及び廃校時に発行された写真帖『熊本陸軍幼年学校記念』（昭和２年），戦後発行された『大いなる熊本陸軍幼年学校』（昭和 43 年）を参照した。後者によれば図画は明治 30 年の開校時から大正６年８月まで山崎兎茂吉が一人指導し，その後も嘱託として山崎が大正 15 年８月以降まで担当した。山崎は明治 20 年の京都新古美術会に京都府画学校から鉛筆画を出品しているので，同校西宗画科中退と思われる西洋画家である。『大いなる熊本陸軍幼年学校』には「福岡の人で，福岡弁丸出しであった。城の写生を良くやったものである」という回想が収録されている[16]。昭和 14 年に熊本陸軍幼年学校が再設置されてからは，東京美術学校卒業の飛岡文一，大道武男が勤務する[17]。

7. 陸軍予科士官学校

既述のように和 12 年 8 月に陸軍士官学校予科が分離して陸軍士官学校と幼年学校の間にある２ヶ年課程の学校として昭設置された[18]。図画科の内容は高度な図学になったと思われる。図画教員名は。杉山甚一は大正 15 年の文検西洋画・用器画の合格であるが，昭和８年に高等図画の文検にも合格した。杉山の後は，森寿正，森一雄と高等師範図画手工専修科卒の教員が勤務する。

６．東京聾唖学校

『東京聾唖学校一覧』及び『東京教育大学附属聾学校の教育―その百年の歴史』（昭和 50 年）等を参照した[19]。東京聾唖学校の教員の勤務期間は学校一覧に勤務期間がきちんと記録されている。そして，図画教育や絵画教育は明治期からしっかりなされている。大正期の図画教員は狩野友信の後継で日本画専門であった。ただ，修業歴はっきりしなかった。徐々に西洋画系に教員の専門も変化していったと思われる。東京聾唖学校は聾唖学校教員の養成ということも目的としていて，師範部とか師範科という課程で聾唖学校図画教員も養成した。卒業生が全国的な団体展覧会にも出品もしていた。昭和 10 年代に油画担当講師として本儀信と安藤信哉が勤務したのも，図画専門教員の養成を意識してのことであろう。安藤信哉は太平洋画会や川端画学校に学び，帝展や文展の常連作家であった[20]。図画教員ではないが，東京美術学校美術工芸科彫金撰科を明治 33 年に卒業した瀧本友太郎が昭和 4 年から 16 年まで美術工芸科担当教員として勤務した。

７．東京高等学校尋常科

『東京高等学校史』（昭和 45 年）等を参照した[21]。東京高等学校尋常科は大正 10 年に設置され，昭和 24 年に東京大学東京高等学校，昭和 26 年に東京大学教育学部附属中・高等学校になり，現在の東京大学教育学部附属中等学校へと続く。高等科部分は戦後に東京大学教養部となる。東京美術学校西洋画科出身の佃武昭は大正 11 年 4 月の開校時に採用され，昭和 29 年 4 月まで勤務する。佃が東京高等学校の最初から最後まで佃が図画を担当した形になる。『東京高等学校史』には「美術部」の項目があり，佃の自由な指導ぶりが回想されている。同書で戦時中に幸田彰，一枡悦三郎が赴任したことが言及されている。幸田，一桝ともに経歴及び正確な勤務期間は不明。

８．東京高等工芸学校附属実修学校

この学校は実業関係学校の章で取れ上げるべきかもしれない。直轄の中等学校に当たるのでとりあえず，ここに入れておく。大正期に七条信実，大正末から久米福衛が図画教員として勤務する。

註

1）　金子一夫『近代日本美術教育の研究　明治時代』（中央公論美術出版，平成 4 年）.

2）　国立国会図書館蔵『学習院一覧』（大正２～７，９, 10，12，昭和５，８, 10, 12,16, 年度），及び『中等教育諸学校職員録』を参照。また，学習院大学の学習院アーカイブズ室の履歴整理カードを参照して，勤務年月を確定した。アーカイブズ室の履歴整理カードは学習院の辞令内容を 1 件ずつカードにして人名順に整理してある。ただ退職辞令のカードがない場合があった。

3）　松室重剛の学習院での図画教育については，鎌田純子「松室重剛と学習院の図画教育」『学習院大学史料館紀要』第 17 号，平成 23 年，155-165 頁が詳しい。

4）　岡倉覚平についての評伝として, 岡倉日出夫「岡倉秋水伝」『五浦論叢』第 16 号, 平成 21 年, 17-47 頁がある。岡倉覚平は大正以後，経歴不明であったが，この評伝によって昭和 25 年まで長生きしたことが判明した。

5）　坪内千秋には著書『随筆千秋』（著者刊，昭和 60 年）があり，勤務期間特定に同書中の履歴関係記事を参照した。

6）『学習院女学部一覧』（大正 2, 4 年度),『女子学習院一覧』（大正８，９, 12, 13, 昭和２, 12 年度）を参照した。なお, 学習院アーカイブズの履歴カード,『女子学習院一覧』の「前職員」,『女子学習院五十年史』（昭和 10 年）の「旧職員名簿」，女子学習院中・高等科『女子学習院中・高等科 100 年史』（昭和 60 年）の「旧職員名簿」には勤務期間が年月日まで記載されているのでそれを参照して勤務表を作成した。

7）『東京高等師範学校一覧』（大正元～ 10 年度），『東京高等師範学校／第一臨時教員養成所一覧』（大正 11, 13, 14, 昭和２年度），『東京高等師範学校附属中学校一覧』（大正９, 14,15，昭和２年度），『東京高等師範学校附属小学校一覧』（大正４～８年度）を参照した。附属中学校に関しては，『中等教育諸学校一覧』も参照。附属小学校に関しては，東京教育大学附属小学校創立百周年記念事業委員会『東京教育大学附属小学校百年史』（同会，昭和 47 年）にある「教官名簿」を参照した。

8）『東京女子高等師範学校一覧』（大正２～７，大正８, 10,12 ），『東京高等師範学校／第六臨時教員養成所一覧』（大正 15, 昭和２～ 12 年度）を参照。また東京女子高等師範学校附属高等女学校『創立五十年』（昭和７年），『東京女子高等師範学校六十年史』（昭和９年）を参照した。『創立五十年』には棒グラフ状の勤務期間表があった。『お茶の水女子大学附属高等学校創立百周年記念誌』（昭和 57 年）及び『（お茶の水女子大学）附属小学校百年史』（昭和 53 年）も参照したが，勤務期間の詳細な記述は無かった。ただ関東大震災で書類が焼失しまい，正確な表ではないとのことである。戦中から戦後にかけて参照すべき資料がない。そこで，お茶の水女子大学付属図書館の教示を基に，戦前期は毎週発行されていた「校報」，戦後初期は附属図書館蔵「学報」にある任免関係記事を参照した。『校報』は Web 公開されている。阿部広司の勤務期間は，これら「校報」「学報」によって確定できた。

9）『広島高等師範学校概覧』（大正７年度),『広島高等師範学校／第二臨時教員養成所一覧』（大正 11 ～ 15 年度, 昭和３年度），『広島高等師範学校附属中学校一覧』（大正７年度）を参照。また広島高等師範学校『広島高等師範学校五十年史　永懐』（広島高等師範学校，昭和 26 年）所収の旧教員表を参照。教科毎に関係教員の勤務年月が記されている。

10）『奈良女師高等師範学校一覧』（大正元～ 10 年度，昭和４, ７,8,12,18 年度），『奈良女師高等師範学校／第三臨時教員養成所一覧』（大正 11 ～ 15, 昭和２～６年度），『奈良女子高等師範学校附属小学校一覧』（大正６年度）を参照した。戦中・戦後期の図画教員についての勤務期間は奈良女子大学所蔵履歴を参照。また，附属小学校教員に関しては，創立八十周年記念誌委員会『わが校八十年の歩み』（同校創立八十周年記念事業実行委員会，平成 3 年）にある「職員」の就任・退任年表を参照した。同書には「旧教官の回想記」に曽根靖雅「木下イズムの捕虜になり六十余年」が収録されている。

11）『陸軍中央幼年学校一覧』（大正３年，５年）及び東幼会『東京陸軍幼年学校史　わが武寮』（東幼会, 昭和 57 年）を参照した。

12）『仙台陸軍地方幼年学校一覧』（大正３年）及び松下芳男『山紫に水清き―仙台陸軍幼年学校史』（仙幼会, 昭和 48 年）。川端の赴任は『東京美術』第 11 号（昭和 12 年）の「会員の動静」を参照。

13）名古屋陸軍地方幼年学校一覧』（大正３年）及び名幼会『名幼校史』（名幼会，昭和 49 年）を参照した。

14）『大阪幼年学校一覧』（大正３年）及び『大阪陸軍幼年学校記念』（大正 11 年３月）の巻末所収の教員一覧

を参照。

15） 広幼会『鯉城の稚桜―広島陸軍幼年学校史』（広幼会，昭和 51 年）の「主要学校職員表」によって図画教員の勤務期間を推定した。

16）桜井徳太郎「幼年学校教育の思い出」筑紫二郎『大いなる熊本陸軍幼年学校』（熊幼会, 昭和 42 年）179 頁。

17）大道武男の勤務期間は，茨城大学美術科同窓会『６号館』第六号（大道武男先生茨大退官記念特集），昭和 54 年，所収の年譜を参照。

18） 陸軍予科士官学校高等官集会所『振武台の教育』（開成館，昭和 19 年）。図画教員の杉山甚一，森寿正の勤務は雑誌『美育』の個人消息欄を参照。

19） 全体的に『東京聾唖学校一覧』（大正元年～昭和 10 年，昭和 16, 17 年）。『東京教育大学附属聾学校の教育―その百年の歴史』（東京教育大学附属聾学校，昭和 50 年）を参照した。

20）茨城県立美術博物館『安藤信哉遺作展』（茨城県立美術博物館，昭和 60 年）。

21）東京高等学校史刊行委員会『東京高等学校史』（東京高等学校同窓会，昭和 45 年）。佃の離任時期は，東京大学教育学部附属中・高等学校創立 50 周年記念誌編集委員会『創立 50 周年記念誌』（同会。平成 10 年）70 の芸術科旧教官一覧を参照した。